



京都大学大学院経済学研究科
ディスカッションペーパーシリーズ

アカデミック・アントレプレナーの正統性 獲得におけるアクセラレーターの役割

山口 太郎 京都大学大学院医学研究科・特定准教授
柳 淳也 京都大学経営管理大学院・特定准教授
山田 仁一郎 京都大学大学院経済学研究科・教授

No. J-26-001

2026年4月

〒606-8501

京都市左京区吉田本町
京都大学大学院経済学研究科

アカデミック・アントレプレナーの正統性獲得におけるアクセラレーターの役割

山口 太郎¹ 柳 淳也² 山田 仁一郎³

要旨

本研究は、アカデミック・アントレプレナーが正統性を獲得する過程において、アクセラレーターの役割を明らかにすることを目的とする。外部ステークホルダーによる「外部正統性」と、価値観やビジョンの共有による「内部正統性」に着目し、大学発の創業チームや研究者がどのように正統性を得ていくかを分析した。アクセラレーター、バイオベンチャー、投資家への半構造化インタビューによる質的分析の結果、外部正統性は選抜や支援を通じてスタートアップの信頼性を高めるが、投資判断への影響は限定的であった。一方、内部正統性の獲得は、企業家としての自信や組織の方向性の形成を促し、持続的成長に寄与することが示された。本研究の貢献は、アクセラレーターが研究者、創業チームの外部・内部正統性の獲得を支援し、その過程で、研究者は企業家へ、創業チームはスタートアップへと変容し、それが成長促進につながることを明らかにした点にある。

Keywords: Accelerator, External Legitimacy, Internal Legitimacy, Academic Entrepreneur

¹ 京都大学大学院医学研究科 yamaguchi.taro.6v@kyoto-u.ac.jp

² 京都大学経営管理大学院 yanagi.junya.7y@kyoto-u.ac.jp

³ 京都大学大学院経済学研究科 yamada.jinichiro.4t@kyoto-u.ac.jp

1. 研究の背景

アクセラレーターは、スタートアップに対して、通常 3 ヶ月から半年程度の期間でプログラムを提供し、メンタリング、セミナー、ネットワーキングの機会など多岐にわたる支援を行う、スタートアップ・エコシステムにおける重要なプレイヤーの一つである。

アクセラレーターに関する学術的研究は、2010 年頃から主に米国を中心に展開されてきた。初期の研究では、アクセラレーターの定義や特徴の明確化が行われ (Cohen, 2013)、その後、参加企業と不参加企業のパフォーマンスを比較する研究が進展した (Hallen, Bingham and Cohen, 2014; Smith and Hannigan, 2015)。これらの研究は、起業家の学習効果、メンタリングの有効性、ネットワーク構築、さらには資金調達や成長率といったパフォーマンス指標への影響を中心に、アクセラレーターの効果を検討してきた。

さらに近年では、アクセラレーターの支援内容や構成要素とスタートアップの業績との関係 (Gonzalez-Uribe and Leatherbee, 2018; Cohen, Fehder, Hochberg and Murray, 2019)、地域やエコシステム全体への波及効果 (Fehder and Hochberg, 2019) に関する研究が展開されている。また、理論的アプローチとしても、ダイナミック・ケイパビリティ (García-Ochoa, 2020) や組織学習 (Gonzalez-Uribe and Leatherbee, 2018) などの枠組みを用いた分析が試みられている。

一方で、スタートアップの成長過程においては、市場や投資家、その他の外部アクターからの承認を得るための正統性の構築が重要であると指摘されており、アクセラレーターがその正統性獲得に寄与する可能性も示唆されている (北, 2013; Fisher, Kotha and Lahiri, 2016)。しかしながら、アクセラレーターによるスタートアップの正統性構築そのものに焦点を当てた研究は依然として限られている (Stayton and Mangematin, 2019)。加えて、従来研究の多くは海外のアクセラレーターを対象としており、日本のアクセラレーターを分析対象とした研究はまだ初期段階にとどまっている (内田・芦澤・軽部, 2022; 山口・岩田・梶山, 2022; 山口・岩田・梶山, 2024)。

そこで本研究では、日本のアクセラレーターを対象とし、従来研究では十分に検討されてこなかった「正統性」という観点に着目することで、スタートアップの成長過程においてアクセラレーターが正統性の獲得にどのように貢献しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2-1. 正統性¹⁾

スタートアップは、その新規性ゆえに、資金調達や取引先の開拓、従業員の採用など、成長に必要な経営資源を獲得することが難しいという「新規性の不利益 (liability of newness)」 (Stinchcombe, 1965) の問題に直面する。この課題を克服するためには、スタートアップは「正統性」を構築する必要がある。正統性とは、組織の行動が社会的に望ましく、適切であると広く認識されることであり、社会的に構築された規範や価値、信念、定義に基づいて評価されるものである (Suchman, 1995)。正統化のプロセスは時間とともに変化し、組織はその環境に適応するか、あるいは環境を操作することで正統性を獲得することが可能である (Suchman, 1995)。

正統性の源泉は、組織の内外に存在するさまざまな利害関係者や評価主体によって構成

される。これには、国家や法的機関、弁護士、会計士、知識人などが含まれ、これらの集団が組織の行動が受け入れられるかどうかを判断する権威を持っている (Meyer and Scott, 1983; Deephouse and Suchman, 2008)。特にスタートアップのような新興企業にとって、正統性は、投資家や顧客、取引先といった外部ステークホルダーから信頼を得るための基盤となる。なお、正統性の源泉は単一の主体に限定されず、複数の要因が相互に関連しながら正統性を形成する。

2-2. スタートアップにおける正統性

設立初期段階において外部のステークホルダーから正統性を獲得することは、極めて重要な課題である。では、スタートアップは、どのようにして正統性を獲得するのだろうか。

Tornikoski and Newbert (2007) は、組織が企業化する過程 (組織創発, organizational emergence) を正統性の獲得として捉えた上で、スタートアップは単に市場での魅力やリソースを持つだけでは不十分であり、積極的なネットワーキングやリソースの組み合わせといった戦略的行動が正統性の獲得には不可欠であることを主張している。

さらに Fisher, Kotha and Lahiri (2016) によれば、スタートアップは構想段階、商業化段階、成長段階の各フェーズで異なる正統性の要求に応じなければならない。

また、Stayton and Mangematin (2019) は、アクセラレーターがスタートアップの成長を加速させる 4 つのメカニズムのなかの「キャッチアップ」というプロセスにおいて、アクセラレーターの選抜プロセスが正統性の付与に重要な役割を果たすと述べている。すなわち、アクセラレーターによる選抜基準をクリアしたスタートアップは、外部からの信頼を得やすくなり、正統性を獲得するプロセスが加速される。

これらの研究の知見を統合すると、スタートアップが持続的に成長するためには、外部ステークホルダーから正統性を獲得することが不可欠であり、その過程では戦略的行動が重要である。さらに、正統性は一度獲得すれば安定するものではなく、事業フェーズの進行に応じて、継続的に獲得・維持される必要があり、アクセラレーターがスタートアップに関与する時期によって正統性の付与に与える影響に変化があることも示唆されている。

2-3. アカデミック・アントレプレナーの外部正統性・内部正統性

本研究では、さらにアカデミック・アントレプレナーへと焦点を絞る。なぜなら、アカデミック・アントレプレナーは、大学や研究機関での研究成果を基に起業を行うため、ビジネス経験の不足や市場理解の欠如から、商業的な成功を収めるための正統性獲得において特有の課題に直面するからである (Clarysse, Tartari and Salter, 2011; Wright, 2014)。技術的には高い評価を得る一方で、ビジネス上の信頼や市場での認知を確立することが困難であり、このため、商業化のプロセスでは特に外部からのサポートが重要となる (Shane, 2004)。

Vohora, Wright and Lockett (2004) は、アカデミック・アントレプレナーが市場での信頼性を確保し、成功するためには、技術的な強みを商業的な正統性へと転換する必要があると述べている。また、Lockett and Wright (2005) は、技術的な正統性を持つアカデミック・アントレプレナーが、ビジネス上の正統性を獲得するためには、事業運営の経験や市場での実績を補完する外部支援が不可欠であると指摘している。したがって、スタートアップ・エコシステムにおいて、正統性の獲得が企業成長の鍵となるアカデミック・アントレプレナーを分析対象とすることで、アクセラレーターによる正統性獲得支援の効果はより顕著に現れると考えられる (山田, 2006)。

ここまで述べてきた正統性に関する従来の研究の多くは、暗黙裡に外部のステークホル

ダーから与えられる「外部正統性」に焦点を当ててきた。一方、組織の内部メンバーが与える「内部正統性」については、十分に研究されていない (Drori and Honig, 2013; Brown and Toyoki, 2013; Sapir, 2019)。

内部正統性は、組織メンバーや組織アイデンティティと深く関連し、組織内での権力闘争や交渉を通じて再構成される (Brown, 1994; Landau, Drori and Terjesen, 2014)。Drori and Honig (2013) によれば、外部正統性が、外部ステークホルダーからの承認を得ることでリソースの確保や評判の向上を可能にする一方で、内部正統性は、組織内での価値観やビジョンの共有を通じて行動の一貫性や動員力を生み出す。新興企業における内部正統性の維持と外部正統性の獲得のトレードオフが、組織の成功にとって重要である。特に内部正統性の獲得は、アイデンティティの形成と安定化に重要な影響を与える。内部正統性とは、組織の構成員が自らの所属する組織や制度を「望ましく、適切で、妥当である」と受け入れる集団的な感覚であり (Suchman, 1995; Brown and Toyoki, 2013)、これはアイデンティティの構築と密接に連動する。Brown and Toyoki (2013) は、内部正統性を、組織内における語り (identity talk) や意味づけのプロセスとして捉え、アイデンティティワークが同時に正統性の獲得・確認・拒否という機能を果たすことを示した。特定の自己像を語る行為は、その語りを許容する組織的枠組みの中でのみ成立しうるため、アイデンティティは正統性の支持を通じて形成される。

また、内部正統性の獲得は、単に役割遂行を可能にする条件というだけでなく、個人が「自分はここに属している」「この役割を担うにふさわしい」と感じることでできる心理的・社会的基盤を提供する (Brown and Toyoki, 2013)。この基盤は、個人の行動に一貫性や方向性をもたらすだけでなく、組織や制度の枠組みの中で自らの存在を意味づけるための支えとなる。

このように、内部正統性の獲得は、個人の語りや行動が受け入れられ、社会的に位置づけられる過程そのものであり、それゆえにアイデンティティ構築における中心的なメカニズムとして機能する。既存の研究が示すように、正統性を巡る交渉や承認のプロセスは、自己がどのように定義され、他者によって認識されるかを規定し、その結果としての安定したアイデンティティを形作るのである。本研究において用いる内部正統性は、Drori and Honig (2013) および Brown and Toyoki (2013) の議論に依拠し、「組織構成員が、自らの組織や役割、行為を『正統なもの』として引き受けていくプロセス」として捉える。本研究が対象とするアカデミック・アントレプレナーの多くは少数の研究者による起業であり、組織構成員と経営者が実質的に一致している。そのため、経営者自身の語りや自己認識の変化は、組織内部における正統性承認の過程を示すものとして解釈できる。

総じて、アカデミック・アントレプレナーの成功には、(1) 外部ステークホルダーからの承認を得て資源動員を可能にする外部正統性と、(2) 組織内部でビジョンや価値観を共有し行動の一貫性を生む内部正統性の双方が欠かせない。本研究では両者を明確に区別し、アクセラレーターがそれぞれの正統性獲得プロセスにどのような影響を及ぼすのかを検証する。

2-4. 正統性の操作化

しかしながら、こうした概念は、どのように観測し分析することが可能だろうか。正統性 (legitimacy) の概念が社会科学においてさまざまな文脈で使用されているにもかかわらず、具体的な測定基準が統一されていない点に注目し、Schoon (2022) は正統性を「正統性の対象 (object of legitimacy)」「観衆 (audience)」「期待 (expectations)」の3つの要素が絡み合うダイアッド (dyad) として定義し、正統性を操作化 (operationalization) するための包括的な枠組みを提案している (Schoon, 2022)。

Schoon のアプローチでは、正統性を評価するために3つの必要条件が設定されている。

まず、正統性には対象と観衆の間に明確な期待が存在しなければならない。この期待は、社会的規範や文化的価値、制度的ルールに基づき、対象と観衆との関係性を形作るものである。次に、観衆が対象との関係を認め、同意 (assent) することが求められる。この同意とは、対象が「適切」「正統」「望ましい」とみなされることであり、単なる従属や受け入れとは異なる。最後に、対象が観衆の期待に適合 (conformity) していることが必要である。これら 3 つの条件が同時に満たされることで、正統性は単なる理論上の概念ではなく、具体的に観測可能なものとして操作化される。

さらに、この枠組みは、正統性を固定された状態ではなく、時間の経過や社会的状況の変化に応じて動的に変化するプロセスとして捉えることを可能にしている。たとえば、観衆の期待が変化することで正統性を失う場合もあれば、新たな条件下で再獲得されることもある。この視点により、正統性の操作化は、個別の事例研究から社会全体の変動に至るまで、幅広いスケールでの分析を可能にしている。

本研究では、この Schoon (2022) のモデルを拡張して、アクセラレーター支援によるアカデミック・アントレプレナーの正統性獲得について、内部正統性と外部正統性の視点から分析する。

以上より、リサーチ・クエスション (RQ) を導出する：

大学発の研究者／創業チームは、アクセラレーターの支援によって、どのようにして正統性を獲得し、アカデミック・アントレプレナー／スタートアップとしてのアイデンティティを構築するのか。

3. 研究方法

3-1. データ

2022 年 8 月から 12 月にかけて、アクセラレーターを運営する企業 3 社および自治体の運営担当者 5 名、参加したバイオベンチャー 2 社の代表取締役等 3 名に、また 2023 年 7 月に、それらのバイオベンチャーに出資した投資家 2 名に半構造化インタビューを行い、2023 年 8 月にメールにて追加の質問を行った。いずれもオンライン (Zoom) で、時間は 1 時間～1 時間半であった (表 1)。許可を得て録音し、起稿を行った。いずれのバイオベンチャーも会社設立前にアクセラレーターに参加している。

インタビュー対象の選定は、本研究が大学発スタートアップを対象にしていることから、バイオベンチャーを支援対象に含むアクセラレーターを選定し、次にそれらのアクセラレーターに参加したバイオベンチャーの中から、大学の研究者が立ち上げ、アクセラレーター参加後に資金調達を実施し、現在も存続しているものを選定し、その投資家を対象とした。

表1：インタビュー対象

	アクセラレーターA	アクセラレーターB	アクセラレーターC	バイオベンチャーX	バイオベンチャーY	VC投資担当者M	VC投資担当者N
インタビュー	ディレクター	VC：マネージャー 自治体：課長代理，他2名	部長	代表取締役，取締役	代表取締役	プリンシパル	執行役員
日時	2022/8/25 2022/9/2	2022/9/1	2022/12/14	2022/9/22	2022/10/3	2023/7/31	2023/7/26
時間	合計約90分	約90分	約90分	約90分	約60分	約60分	約50分
方法	オンライン（Zoom）						
備考	3ヶ月	プログラム期間 6ヶ月	2ヶ月半	設立年月 2020年5月	2016年8月	出資対象 バイオベンチャーX	バイオベンチャーY
				参加時期 2019年7月	2016年7月		

出所：著者作成

3-2. 分析方法

本研究では、アクセラレーターおよびバイオベンチャーに対するインタビューの直後から、起稿データやウェブサイト等の補助資料を参照しつつ、探索的な質的分析を行った。分析にあたっては、既存研究の知見を踏まえ、「選抜効果」「支援効果」「スタートアップの期待」「参加目的」「参加した結果」「アクセラレーターが期待する効果」といった観点から初期コードを設定し、5件のインタビュー記録に対してMAXQDAを用いた反復的なコーディングを実施した。

初期コーディング後にはカテゴリー化を行い、3名の共同研究者間で理論的比較と解釈を重ねるなかで、インタビュー어의語りに共通して「正統性」に関わる表現や認識が見出された。このことから、アクセラレーターの影響を検討する上で「正統性」が中核的な分析概念であると判断し、選択的コーディング法を用いて正統性に焦点を当てた再分析を行った。

さらに、正統性の成立過程をより多面的に捉えるためには、スタートアップおよびアクセラレーターの視点に加え、外部の観衆である投資家の視点が不可欠であると考え、VCへの追加インタビューを実施した。これにより、異なるアクターの語りを比較することで、アクセラレーター参加を通じた正統性獲得の意味とその評価のされ方について、分析を一層深化させた。

4. 結果

インタビュー内容を分析した結果、アクセラレーターの「外部正統性」、スタートアップの「外部正統性」および「内部正統性」が重要な要素として浮かび上がった。また、スタートアップの正統性は、個人（研究者）に対するものと、組織（創業チーム）に対するものが明らかになった。

4-1. アクセラレーターの支援によるスタートアップの外部正統性獲得

まず、スタートアップの外部正統性について考察する。アクセラレーターの主な目的は、プログラム参加企業が成長し、最終日のデモデイ（Demo Day）で投資家からの資金調達に成功することである。そのため、アクセラレーターは成長が見込まれるスタートアップを厳選し、セミナーやメンタリングを提供することで、VC に対するスタートアップの外部正統性獲得を支援する。アクセラレーターに応募した創業チームが、審査を経て選抜されることによって、アクセラレーターから成長ポテンシャルを有するという外部正統性を付与されることになる。インタビューしたアクセラレーターC は、この選抜による外部正統性の獲得について、以下のように述べている。

一定の信頼を与えるっていう価値はあると思うんですけどね。（中略）そこでちゃんと選ばれたっていう。誰かしらのその第三者の目を通っているっていうところは、多分そこはそこで重要な価値だろうとは思いますが（アクセラレーターC）

また、アクセラレーターが提供するセミナーやメンタリング、ネットワーキングの機会を通して、創業チームが成長ポテンシャルのある組織に変革しているという外部正統性が付与される。例えば、以下の通りアクセラレーターB は、支援の中で、創業チームに経営人材、メンターをマッチさせることで、創業チームに与信が取れるチームという外部正統性を与えている。

与信のない人はデータを採るところもできないんですね。なので、与信を取らせてもらえる人になるというのが、すごく大事なこと。与信を取ることのできるチームになるっていうことがすごく大事なんですよ（アクセラレーターB）

さらに創業チームがアクセラレーターに選抜されることによって、アクセラレーターは組織（創業チーム）だけでなく、個人（研究者）に対しても、研究者が企業家になり得るポテンシャルがあるという外部正統性を付与することになる。アクセラレーターA は、以下のように述べており、アクセラレーターは、研究者に対し研究成果がどのようにビジネスとして展開できるかを理解させ、これによって研究者は企業家として事業化プロセスを把握し、その実現可能性が高まるとともに外部からの正統性を獲得できる。

その資金の調達も必要になっていく時に、出し手の方がただでさえ研究開発型って出資を躊躇するような分野だったりとかするので。投資側から見た時にその技術がどういう風に活かされて、将来どういう風に世の中に浸透していくのか、ビジネスになっていくのかっていうことを企業家が言えないと、お金が調達できないとなれば当然必然的に、その研究もストップしてしまうことになる（アクセラレーターA）

以上の発言を踏まえると、アクセラレーターは、個人（研究者）および組織（創業チーム）に対する外部正統性を獲得する支援を行い、VC からの資金調達を促進していると考

えられる。では、第三者である VC はアクセラレーターをどのように評価しているのだろうか。

4-2. アクセラレーターの外部正統性

意外にも投資担当者は必ずしもアクセラレーターへの参加による正統性を自明的には認めてはいない。例えば、投資担当者 N さんは、アクセラレータープログラムへの参加の有無は、現在の投資判断に全く影響がないと言い切っている。

今はアクセラレーションプログラム、ディープテックのアクセラレーションプログラムも山のようにありますし、かつ、私自身も成長してきている中で、ほんとにいいスタートアップさんって、そういうとこ、実は出ないんですよ、実は。っていうようなところもちょっとあったりとかして、出ることもあるんですけども、相当よりすぐって出てるっていう感覚があるので、今の投資判断にはまったくそのアクセラレーションプログラムに出てるかっていうのは、まったく影響はないです、特にバイオに関しては（投資担当者 N）

また、投資担当者 M さんも一部のアクセラレーターは例外として評価はしているものの、日本のアクセラレーターへの参加を投資判断の直接の要因にはしていないと主張している。

ただ、そこに参加したからって、別に色眼鏡はやっぱりみんな何も付かない感じでしたよね。アメリカのアクセラとかだと、Y コンビネーターとか、やっぱりあそこで出てることっていうのが 1 個セクションがすごいかって、選ばれてんなっていうのもあったりしますし（投資担当者 M）

このように、アクセラレーター、スタートアップの間では、スタートアップがアクセラレーターに参加することによって、投資対象になり得るレベルの外部正統性の獲得が達成されると考えているが、一方、投資担当者の方ではそこまでの外部正統性の獲得が達成されているとは考えていないのである。

しかし、投資担当者の間でもアクセラレーターは、全く意味がないわけではない。バイオベンチャーがアクセラレーターに参加することについての一般的な意味を、投資担当者 N は以下のように語っている。

きっかけ、知るきっかけになったし、あ、こういうところで頑張ってる人たちなんだと、自主的に一步を踏み出してると人たちなんだっていう気づきにはなってますね（投資担当者 N）

また、投資担当者 N は、バイオベンチャー Y がアクセラレーター C に参加し、賞を獲得したことに對して、

アクセラレーターも全然なくて、特にディープテック系は。だったの、ある意味、特にあとはアクセラレーター C さんがアクセラレーションってわりととがったものなので、当時のあのマーケットの状況と私がまだ VC に入って数カ月っていう、その 2 つの要素を考えると、非常にポジティブに働きました（投資担当者 N）

と述べており、現在は批判的にアクセラレーターを注視している N さんも、当時はバイオベンチャー Y がアクセラレーター C に参加したことを、ポジティブに評価していたことを示唆している。このように、外部正統性の認識は、マーケット状況と投資担当者の経験に左右されると考えられる。

投資担当者レベルでは、アクセラレーターの参加の有無は投資判断に影響を与えない一方で、こうした情報は、投資委員会等での説明資料に記載がなされることもある。例えば、バイオベンチャーXの案件では、アクセラレーター採択の事実は、「社内の説明やメモでもファクトとしては（投資担当者M）」伝えられていた。

また、それ以外の案件においても、対象候補の情報の一つとして、アクセラレーター参加を記載していることがうかがえた。

どこかのアクセラに参加しました/参加しているは、ファクトとしてメモ等に記載自体はされてます。resume等の受賞歴みたいな感じでしょうか。（中略）『PR TIMES』とか『日経新聞』とか、メディアでぱっと流れた時に、ここが例えば賞を取りましたとか、FacebookなりSNSで流れてきた時に、どういうベンチャーが採択されてんのかな、例えばその大学でどういうのが増えてんのかなっていうのを、見に行く（投資担当者M）

このようにファクトとして記載するという事は、一定程度の外部正統性を認めているものと考えられる。

上記をまとめると、投資担当者としては一部の選抜の厳しいアクセラレーター以外は、ほとんど投資判断に影響しておらず、非常に批判的にスタートアップへの影響を注視していることが読み取れる。つまり、VCは、アクセラレーターがスタートアップを投資対象になりうるレベルに成長促進させるアクターとしての外部正統性を認めていない。しかしながら、VCとしてはアクセラレーターへの参加を事実として伝えるという程度には、アクセラレーターの外部正統性を認め、活用していることが示唆された。

4-3. アクセラレーター支援によるスタートアップの内部正統性獲得

次に、スタートアップの内部正統性について検討する。内部正統性とは、組織内部のメンバーが戦略や行動を正統なものとして受容することであり、組織内で共有される価値観やビジョンが、行動の一貫性やメンバーの動員を支える重要な要素となる（Drori and Honig, 2013）。

アカデミック・アントレプレナーの場合、研究者自身が起業することが多いが、経営に関する知識や経験を十分に有さないことが一般的である。その結果、創業メンバーが研究者中心となり、経営人材が不在となる場合がある。このような状況では、事業化の方向性や経営方針を明確にできず、ビジョンの共有が困難となり、一貫した行動やリソース動員が阻害され、組織の結束が弱まる。

研究者がアクセラレーターに参加し、セミナーやメンタリングを通じた支援を受けることで、企業家マインドセットや経営知識を獲得し、事業運営能力を高めることができる。また、経営人材の獲得や組織基盤の強化を通じて、安定した経営体制が構築される。これにより、研究者は企業家としてのアイデンティティを確立し、創業チームは明確なビジョンのもとで自信を持って活動できる。アクセラレーターの支援は、スタートアップの内部正統性獲得を促し、成長と成功の基盤形成に寄与するのである。

バイオベンチャーXは、アクセラレーターの中で会社設立に関し法務等の支援を受け、会社として、きちんと事業のやりとりができるスタートアップであるという内部正統性を獲得しており、以下のように述べている。

技術だけが先行してる中で、やっぱり会社っていう箱と枠組みっていうのをしっかり作ってるっていう意味では、やっぱりああいうのに参加すると全然違うなっていうふうには思いました（バイオベンチャーX）

また、バイオベンチャーYのCEOは、以下のように述べており、アクセラレーターの支援によって、研究者は経営や法務に関する知識を身に付け、自分たちのビジネスの事業ポテンシャルを理解することで、自分はスタートアップを運営できる企業家であるという内部正統性を獲得している。

もともと会社はいずれつくろうと思ってたけど、つくるきっかけをもらったっていうような感じです (バイオベンチャーY)。

バイオベンチャーYを支援したアクセラレーターCも

研究者としてのMさんから、これを事業にしようよっていうところの後押しをしたのが多分、僕らの一番の貢献だったんじゃないかなと (アクセラレーターC)。

と述べており、アクセラレーターによる支援が内部正統性獲得につながったと考えられる。

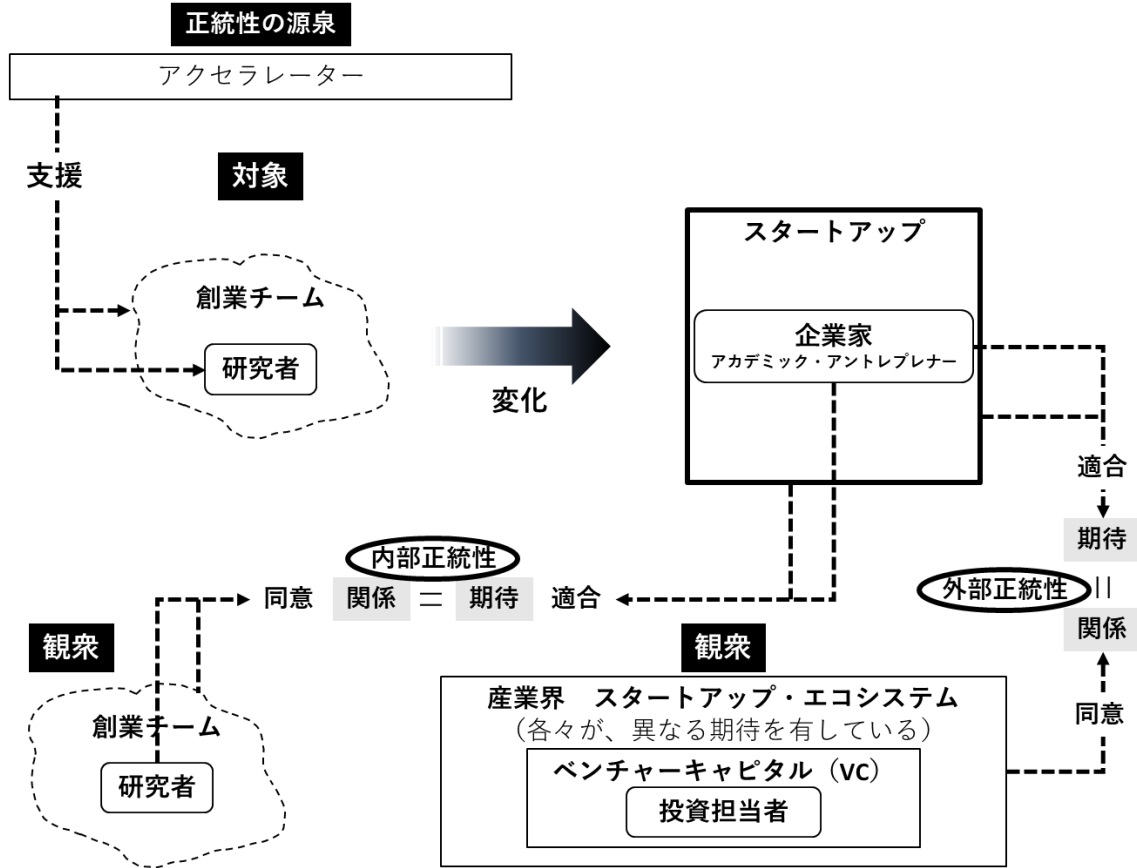
これらの事例から、アクセラレーターは選抜や支援プログラムを通じて、研究者や創業チームが内部正統性を獲得することを促進していると考えられる。研究者や創業チームは、内部正統性を獲得することで企業家やスタートアップとしての明確なアイデンティティを確立し、ビジョンを設定して必要なリソースを動員しながら一貫性のある経営活動を行うことで、スタートアップとしての成長を促進する。

5. 考察

本研究では、アクセラレーターがアカデミック・アントレプレナーの正統性獲得において果たす役割を明らかにした。アクセラレーターは、個人（研究者）および組織（創業チーム）に対する外部正統性と内部正統性の獲得において、重要な役割を果たしていることが示された。アクセラレーターは、提供する支援を通じて、スタートアップの外部正統性を獲得し、投資家などからの資金調達を促進することを目指している。また、研究者・創業チームがアクセラレーターに参加することで、内部正統性が獲得され、企業家、スタートアップとしての活動が促進される。

まず、スタートアップの外部正統性の獲得について述べる。アクセラレーターは選抜プロセスを通じて、組織や個人に外部正統性を付与すると考えられる。組織に対しては、成長可能性のある技術（特許など）を保有することが認められ、個人に対しては、優れた研究者であり、将来的に企業家となる可能性があることが示唆される。また、アクセラレーター内で提供されるセミナーやメンタリングなどの支援を通じて、外部正統性はさらに強化される。具体的には、組織には経営陣が整い、チームが形成され、提供する価値が明確であることが外部正統性として示される。一方で、個人に対しては、研究者が企業家マインドやビジネススキルを習得していることが外部正統性として認められる。アクセラレーターが、研究者・創業チームの外部正統性を獲得することで、創業チームがスタートアップへ、研究者が企業家へと変化し、成長可能性が示されると考える。Schoon (2022) のモデルに当てはめると、正統性の「対象」はスタートアップ、「観衆」は産業界、スタートアップ・エコシステムに相当し、スタートアップが産業界からの「期待」、すなわち「スタートアップとしての成長ポテンシャルを有している」という期待に適合することで、外部正統性が確立されると言える (図 1)。アクセラレーターは「正統性の源泉」となり、そのプログラムを通じて、スタートアップの外部正統性の獲得を支援し、VC からの資金調達を促進していると考えられる (図 1)。

図 1：スタートアップの外部・内部正統性



出所：著者作成

しかしながら、アクセラレーターへの参加がスタートアップの正統性獲得に一定の影響を与えるものの、投資担当者はアクセラレーター参加そのものを直接的な投資判断の根拠とはしていない。ただし、アクセラレーターに参加したスタートアップが投資対象として十分な正統性を持つとは見なされていないものの、投資委員会の資料などにはアクセラレーター参加の事実が記載されており、そのレベルでの正統性は認められているといえる。Schoon (2022) が示す観衆の期待には、強弱のグラデーションがあると考えており、すなわち、アクセラレーター参加によって得られる外部正統性は、VCの「投資対象としての期待」に完全に合致するほど強いものではないものの、少なくとも「投資判断資料に記載するに値する」レベルの期待には適合していると考えられる。したがって、アクセラレーターは限定的ではあるが外部正統性を付与していることが示唆された。

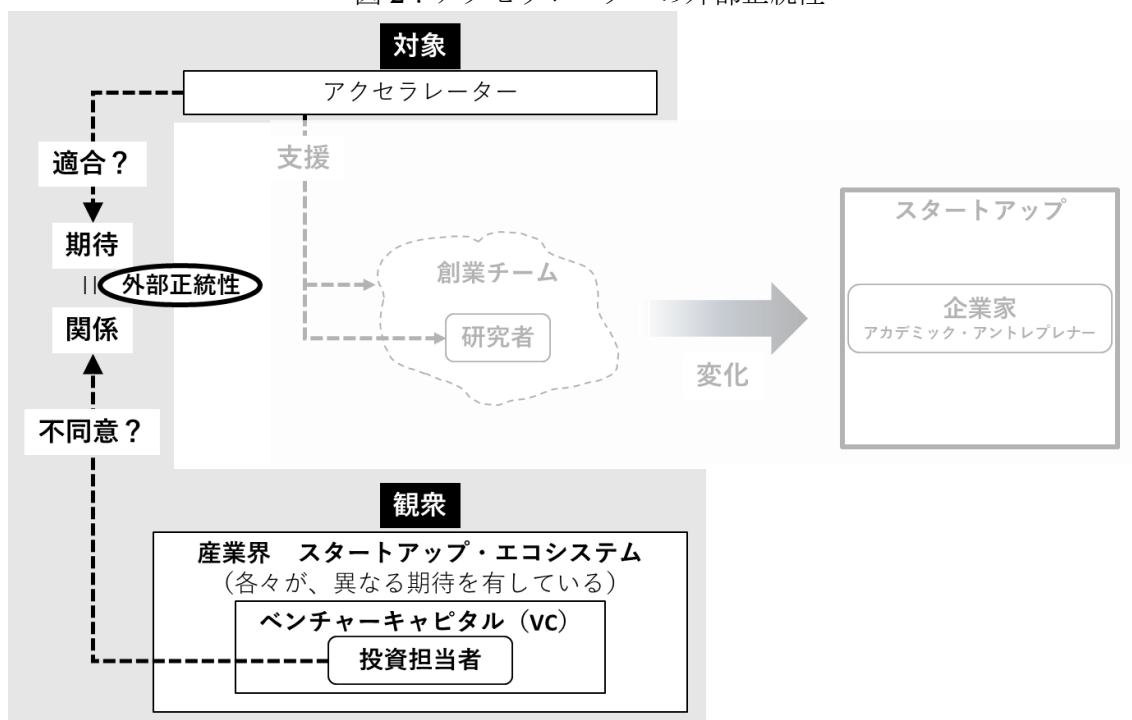
さらに、投資担当者 Mさんは次のように述べており、アクセラレーターのレベルに応じて、付与される正統性のレベルが異なることも示唆される。

アメリカのアクセラとかだと、Y コンビネーターとか、やっぱりあそこで出てることっていうのが 1 個セクションがすごいかって、選ばれてんっていうのもあったりしますし (投資担当者 M)。

アメリカの著名なアクセラレーターである Y コンビネーターの場合、厳格な選考プロセスを経たこと自体が高い外部正統性を示し、投資担当者から「選ばれたスタートアップ」として評価される可能性が高いと考えられる。このことから、アクセラレーターの質によって、スタートアップが獲得できる正統性の程度が異なることが分かる。アクセラレータ

一は、投資家の「期待」を、自らがスタートアップを投資対象となり得るレベルまで成長させることであると認識し、自分たちがその期待に「適合」していると考えているが、本研究における投資担当者へのインタビュー結果によれば、投資家が抱く「期待」とアクセラレーターが認識する「期待」にはズレがあることが示唆された。投資担当者は、アクセラレーターがスタートアップを成長させ、それが投資対象となるという関係に完全には同意していないことが明らかになった。したがって、アクセラレーターが投資家に対する外部正統性を有しているとはいえない（図2）。

図2：アクセラレーターの外部正統性



出所：著者作成

次に、内部正統性の獲得について説明する。アクセラレーターの支援を通じたアカデミック・アントレプレナーの内部正統性獲得において、研究者や創業チームは正統性の「対象」であると同時に、その正統性を評価する「観衆」の役割も担っている。アクセラレーターに参加する前の研究者や創業チームは、経営に関する知識やネットワークが乏しく、自分たちの研究成果をどのように事業化すればよいのか分からない状態にある。その結果、ビジョンや方向性が不明確で自信を持たず、リソースを投入する決断もできないため、内部正統性が獲得されていない状態といえる。しかし、研究者中心の創業チームは、アクセラレーターの支援を受けて経営体制を整えることで、自らの研究チームがスタートアップであるという内部正統性を獲得できる。また、アクセラレーターの支援を通じて経営や法務に関する知識を習得し、自らのビジネスが持つ事業ポテンシャルを理解することで、自分がスタートアップを運営できる企業家であるという内部正統性を確立することが可能となる。内部正統性を獲得することで、研究者は企業家としての自己認識を、創業チームはスタートアップとしての存在意義を形成できる。

このように、アクセラレーターによる支援を通じて研究者や創業チームが内部正統性を獲得することは、彼らが企業家、スタートアップとしてのアイデンティティを構築する上で重要な役割を果たす。内部正統性は、単に組織内での意思統一や方向性の明確化をもたらすだけでなく、個人が「自分は企業家である」「自分たちはスタートアップとして妥当な

存在である」と認識し、その役割を引き受けるための心理的・社会的な土台を提供する。特にアカデミック・アントレプレナーにとっては、研究者という専門的な立場から企業家という新たな役割への移行が求められるが、アクセラレーターにおける支援や周囲からの承認を通じて得られる内部正統性が、その暫定的な自己像（provisional selves）を企業家としての確信へと発展させる。

また、創業チームとしての内部正統性が高まることで、チーム全体としても「自分たちはスタートアップとして適切に機能している」という集団的なアイデンティティが形成される。こうした過程を通じて、個人としても組織としても、企業家やスタートアップとしての社会的役割を引き受け、周囲との相互作用の中でその役割にふさわしい存在であると認められていく。このように、内部正統性の獲得は、企業家・スタートアップとしてのアイデンティティを安定的かつ持続的に確立するための基盤となるのである。

その結果、研究者は明確なビジョンを持って企業家活動に一貫して取り組み、資金調達などの経営資源の獲得を積極的に進めることが可能となる。Schoon のモデルに当てはめると、図 1 のようになる。内部正統性の場合、研究者や創業チームは正統性を付与される「対象」であると同時に、正統性を付与する「観衆」でもある。アクセラレーターは「正統性の源泉」として機能し、研究者や創業チームを支援することで、それらが期待する企業家やスタートアップに適合するよう成長を促す。

以上のように、アクセラレーターの支援によってアカデミック・アントレプレナーが外部正統性および内部正統性を獲得することが、その成長促進に影響を及ぼすことが示唆された。これまでの研究において、アクセラレーターによる成長促進効果は、セミナーやメンタリング、ネットワーキングによるものが中心であったが、本研究によって、正統性の視点からのアクセラレーターの影響が明らかになった。

6. 結び

6-1. 本研究の貢献

本研究は、アクセラレーターがスタートアップの成長を促進するプロセスを、外部正統性と内部正統性の両面から捉え、アクセラレーターとスタートアップそれぞれの正統性を区別して分析し、明らかにしたものである。理論的な貢献としては、先行研究において十分に解明されてこなかった、アクセラレーターがスタートアップの組織および個人に対して正統性を付与するプロセスを具体的に示した点が挙げられる。アクセラレーターは、参加する創業チームや研究者を選抜・支援することを通じて、限定的ではあるものの外部正統性を付与し、スタートアップが投資家からの資金調達を達成しようとする過程に関与している。加えて、本研究は、外部正統性を一様なものとして扱う傾向にあった従来研究に対し、外部正統性の強さにはグラデーションが存在することを明らかにした点でも理論的貢献を有する。すなわち、アクセラレーターへの参加によって付与される外部正統性の意味や強さは一律ではなく、VC をはじめとする観衆によって異なり、それぞれがスタートアップに対して抱く「期待」の水準にも差異が存在する。これは、「観衆によって正統性の意味や強さが異なる」ことを示した Schoon (2022) の理論的指摘を、日本のアクセラレーターの文脈において補強する知見である。

さらに、アクセラレーターによる選抜と支援を通じて、スタートアップとしての内部正統性が獲得され、研究者や創業チームが企業家やスタートアップとしての自己認識を形成し、その妥当性を自ら引き受けていくことで、企業家としてのアイデンティティが構築される。その結果、企業活動へのコミットメントが高まり、スタートアップの成長が促進されると考えられる。正統性に関する既存研究の多くは、投資家、顧客、市場といった外部

ステークホルダーからの承認に基づく外部正統性に分析の力点を置いてきた (Drori and Honig, 2013; Brown and Toyoki, 2013; Sapir, 2019)。これに対し、本研究は、アカデミック・アントレプレナーを対象として、内部正統性、すなわち企業家としての自己認識やスタートアップとしての妥当性を自ら引き受けていく過程に着目し、正統性獲得をアイデンティティ形成のプロセスとして実証的に示した点に意義がある。これは、Brown and Toyoki (2013) が論じた「identity work」としての正統性形成の議論とも符合するものである。

また、正統性の獲得によって正統性獲得の対象が変容する可能性を示したことも貢献である。Schoon(2022)が示した正統性のダイアドにおいて、「対象」が正統性獲得によって変容することは予期されていないが、本研究では、研究者が企業家になることをアクセラレーターが後押ししたことが、データからも観察できた。正統性獲得プロセスによって、「創業チーム」は「スタートアップ」へ、「研究者」は「アカデミック・アントレプレナー」にそれぞれ変容し、ダイアドの「対象」が行為遂行的に変容していくことを示した。

加えて、Schoon(2022)では述べられていなかった「正統性の源泉」、「内部正統性」の観点を統合して分析を実施し、その有用性を示した。本研究では、アクセラレーターを「正統性の源泉」とし、アクセラレーターによるスタートアップの正統性付与の観点を中心に分析を行ったが、スタートアップに対する「正統性の源泉」はアクセラレーターだけでなく、VC など他のアクターの場合もありうるだろう。「内部正統性」については、スタートアップは正統性獲得の対象であると同時に、正統性の有無を判断する観衆にもなる。

実践的意義としては、アクセラレーターの支援によって、スタートアップが成長促進を実現するプロセスを明らかにしたことである。創業チーム、研究者はアクセラレーターにおいて、選抜、支援を通して外部正統性、内部正統性を獲得し、その結果、投資家からの資金調達や大企業との連携の可能性が高まり、また企業家、スタートアップとして企業活動にコミットし、成長が促進されると考える。一方、アクセラレーターは投資家に対する外部正統性を十分に獲得できていない。スタートアップへの投資を促進するには、アクセラレーターが投資家の期待に応え、外部正統性を確立することが重要である。そのためには、選抜や支援内容、実績の情報発信など、具体的な取り組みを検討する必要がある。また内部正統性の獲得については、セミナーやメンタリングに加え、研究者の自己効力感を高めるようなアプローチも必要であると考えられる。

6-2. 今後の研究

今後の研究では、本研究で扱った限られた事例にとどまらず、より多様な事例を対象とした分析が必要である。本研究はバイオベンチャーに焦点を当てており、他分野スタートアップにおける同様の現象は十分に検討されていない。例えば IT ベンチャーでは、大学研究者ではなく企業エンジニアが起業するケースが多く、既にビジネススキルや開発経験を有していることもある。こうした背景の違いは、正統性獲得プロセスやアクセラレーターの役割に差異をもたらす可能性がある。

次に、成長フェーズに応じた外部正統性と内部正統性の相対的重要性の変化について、より詳細な検討が求められる。本研究は設立前にアクセラレーターへ参加したスタートアップを対象としたが、成長段階が進むにつれ、両正統性が成長に与える影響は変化すると考えられる。例えばシード期では内部正統性の確立が重視される一方、成長期には資金調達や大企業連携のため、外部正統性の重要性が高まる。この変化に伴い、成長段階ごとのアクセラレーター支援の在り方を検討する必要がある。

また、アクセラレーターとスタートアップの正統性獲得が相互に与える影響についての分析も重要である (Beyhan, Semih and Cetindamar, 2022)。アクセラレーターが正統性を獲得するには、優れたメンターやパートナー、セミナーに加え、卒業生の EXIT や資金調達といった実績が不可欠である (Beyhan and Fındık, 2022)。両者は正統性を相互に付

与し合う関係にあり，双方の相互作用に着目することで，成長促進プロセスをより精緻に捉えることができる。

さらに，日本のアクセラレーター研究においては，参加スタートアップへの非出資が業績や正統性に与える影響も重要な論点である。日本では多くのアクセラレーターが出資を行わず，これは欧米との大きな相違点である。出資を行うアクセラレーターは投資家としての視点を持ち，期待への適合を重視したプログラム設計が可能であるほか，出資を受けた事実自体が，より高い内部正統性の獲得につながる可能性がある。

【参考文献】

1. Beyhan, B., & Findik, D. (2022). Selection of sustainability startups for acceleration: How prior access to financing and team features influence accelerators' selection decisions. *Sustainability: Science Practice and Policy*, 14(4), 2125.
2. Beyhan, B., Semih, A. I., & Cetindamar, D. (2022). How do technology-based accelerators build their legitimacy as new organizations in an emerging entrepreneurship ecosystem?. *Journal of Entrepreneurship in Emerging Economies, ahead-of-print*. <https://doi.org/10.1108/JEEE-06-2022-0161>
3. Brown, A. D. (1994). Politics, symbolic action and myth making in pursuit of legitimacy. *Organization Studies*, 15(6), 861–878.
4. Brown, A. D., & Toyoki, S. (2013). Identity work and legitimacy. *Organization Studies*, 34(7), 875–896.
5. Clarysse, B., Tartari, V., & Salter, A. (2011). The impact of entrepreneurial capacity, experience and organizational support on academic entrepreneurship. *Research Policy*, 40(8), 1084–1093.
6. Cohen, S. (2013). What do accelerators do? Insights from incubators and angels. *Innovations Technology Governance Globalization*, 8(3–4), 19–25.
7. Cohen, S., Fehder, D. C., Hochberg, Y. V., & Murray, F. (2019). The design of startup accelerators. *Research Policy*, 48(7), 1781–1797.
8. Deephouse, D. L., & Suchman, M. (2008). *Legitimacy in organizational institutionalism*. In R. Greenwood, C. Oliver, K. Sahlin, & R. Suddaby (Eds.), *The Sage handbook of organizational institutionalism* (pp. 49–77). Sage, London.
9. Drori, I., & Honig, B. (2013). A process model of internal and external legitimacy. *Organization Studies*, 34(3), 345–376.
10. Fehder, D. C., & Hochberg, Y. V. (2019). *Spillover effects of startup accelerator programs: Evidence from venture-backed startup activity*, Working Paper, University of Southern California.
11. Fisher, G., Kotha, S., & Lahiri, A. (2016). Changing with the times: An integrated view of identity, legitimacy, and new venture life cycles. *Academy of Management Review*, 41(3), 383–409.
12. García-Ochoa, C. P. (2020). How business accelerators foster startups' dynamic capabilities: A case study. ESIC Market. *Economic & Business Journal*, 51(1), 19–43.
13. Gonzalez-Uribe, J., & Leatherbee, M. (2018). The effects of business accelerators on venture performance: Evidence from start-up Chile. *The Review of Financial Studies*, 31(4), 1566–1603.
14. Hallen, B. L., Bingham, C. B., & Cohen, S. (2014). Do accelerators accelerate? A study of venture accelerators as a path to success?. In *Academy of management proceedings* (Vol. 2014, No. 1, p. 12955). Briarcliff Manor, NY 10510: Academy of Management.
15. Hallen, B. L., Bingham, C. B., and Cohen, S. (2014). Do accelerators accelerate? A study of venture accelerators as a path to success. *Academy of Management Proceedings*, 2014(1), 12955.
16. Landau, D., Drori, I., & Terjesen, S. (2014). Multiple legitimacy narratives and planned organizational change. *Human Relations*, 67(11), 1321–1345.
17. Lockett, A., & Wright, M. (2005). Resources, capabilities, risk capital and the creation of university spin-out companies. *Research Policy*, 34(7), 1043–1057.
18. Meyer, J. W., & Scott, W. R. (1983). Centralization and the legitimacy problems of local government. In J. W. Meyer, & W. R. Scott (Eds.), *Organizational environments: Ritual and rationality* (pp. 199–215). Beverly Hills, CA: Sage.
19. Sapir, A. (2019). Contested internal legitimacy: The emergence of organized academic entrepreneurship. *Journal of Management History*, 26(1), 1–18.

20. Schoon, E. W. (2022). Operationalizing legitimacy. *American Sociological Review*, 87(3), 478–503.
21. Shane, S. A. (2004). *Academic entrepreneurship: University spinoffs and wealth creation*. Edward Elgar.
22. Smith, S. W., & Hannigan, T. J. (2015). Swinging for the fences: How do top accelerators impact the trajectories of new ventures. *Druid*, 15, 15–17.
23. Stayton, J., & Mangematin, V. (2019). Seed accelerators and the speed of new venture creation. *The Journal of Technology Transfer*, 44(4), 1163–1187.
24. Stinchcombe, A. (1965). Social structure and organizations. In J. G. March (Ed.), *Handbook of organizations* (pp.142–193). Chicago: Rand McNally.
25. Suchman, M. C. (1995). Managing legitimacy: Strategic and institutional approaches. *Academy of Management Review*, 20(3), 571–610.
26. Tornikoski, E. T., & Newbert, S. L. (2007). Exploring the determinants of organizational emergence: A legitimacy perspective. *Journal of Business Venturing*, 22(2), 311–335.
27. Vohora, A., Wright, M., & Lockett, A. (2004). Critical junctures in the development of university high-tech spinout companies. *Research Policy*, 33(1), 147–175.
28. Wright, M. (2014). Academic entrepreneurship, technology transfer and society: Where next?. *The Journal of Technology Transfer*, 39, 322–334.
29. 内田大輔・芦澤美智子・軽部大 (2022). 「アクセラレーターによるスタートアップの育成：日本のアクセラレータープログラムに関する実証分析」『日本経営学会誌』(50), 59–72.
30. 北真収 (2013). 「ベンチャー創業期の信頼構築の糸口：市場型ビジネスのケース」『岡山大学経済学会雑誌』45(5), 1–16.
31. 山口太郎, 岩田健吾, & 梶山泰生. (2022). アクセラレーターの支援効果と選抜効果—日本のスタートアップを対象とした定量研究—. 日本ベンチャー学会誌, 40, 19-31.
32. 山口太郎, 岩田健吾, & 梶山泰生. (2024). スタートアップの成長フェーズ・タイプによってアクセラレーター支援の効果は異なるのか?—RBV を援用した考察と実証分析—. 日本経営学会誌, 56, 3-15.
33. 山田仁一郎 (2006). 「不確実性対処としての企業家チームの正統化活動：地方大学発ベンチャーの組織形成プロセスと戦略的社会性」『Venture Review』(8), 23–32.

【脚注】

- 1) Legitimacy を「正当性」と訳する場合も見られるが、「正当」は自己の権利などを主張する際に用いられるのが一般的であり（例：正当防衛, justify の訳など）、本稿では legitimacy には「正統性」の訳を用いる。
綾子會澤. (2020). 正統性の追求が諸刃の剣になるとき. 赤門マネジメント・レビュー, 19(6), 193–204. <https://doi.org/10.14955/amr.0201009a>